

報 海外に子ども用車椅子を送る会

第2号

2005年(平成17年)1月
 事務局 〒197-0012
 東京都福生市加美平3-7-13
 会長：森田 祐和
 副会・編集：森山 和典

**新年明けまして
おめでとうございます**



森田祐和会長(左)と片野智之顧問(右)

森田祐和会長挨拶

新しい年が明けました。おめでとうございませう。皆様はどんな年を望みますでしょうか。私は今年も「心の充足をもとめて」活動したいと考えています。

皆が集い、ひとつの目的に向かって活動する中で、無理のない楽しい、楽しめる会を運営したいと思っております。

昨年は階段を一気に駆け上がるくらい勢いでした。本年は足場を固めて、確実に上がっていきたいと思います。具体的には、長期目標と本年の活動内容、日程などを左記にまとめましたので、拝読頂きたいと思っております。

会の発足時には、資金の事を何も考えず立ち上げました。しかし

輸送費・運営費など多大なるコストがかかる事がわかってきました。私は資金調達のために、奔走する事があるかも知れません。

NPOの法人化を目指し、楽しく活動を進めたいものです。今年も予定と内容が満載ですが、あせらず活動を続けていきたいものです。本年も引き続き皆様のご協力を得て海外に一台でも多くの車椅子を送り出しましょう。

本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

片野智之顧問挨拶

昨年私はこの会をスタートする時に、会員の皆さんに「無理をせず出来ることから始めよう」と言っていたのですが、「出来そうなことはやってみよう」と中年パワーが力をあわせ、短期間で成果を上げた熱意と行動力は素晴らしいものでした。

この活動を通じて国内外に多くの人々との出会いが生まれ、「協力」「支援」いただき、「人は支えられている」と実感しました。

使われた子ども用車椅子が海外でのニーズに応え、資源の有効活用になっていることに、関係者から評価され社会的に期待されています。車椅子を通して人種や宗教を超えて友情を育み励ましあつて、平和で心豊かな世界をつくることこそ私達の願いです。

今年の課題はNPO法人設立で組織の基盤をつくること、活動資金の確保です。会員の皆さんが

力をあわせて多くの子ども達に笑顔が生まれ、共に生きる喜びや感動を分かち合えるよう努めましょう。

子ども用車椅子の会は二年目の活動に入る。二〇〇四年程中身の濃い年はなかった。なぜだろうと考えてみた。

限りなく近い未来を追いかけて爆走！目の前に見える物を収穫しながら更に爆走！この繰り返しで、すさまじい程の凝縮した中身となった。

同世代の友人達との集まりでも過去の思い出話はしなかった。未来の地図を開いて建設的な話は行動が伴い面白かった。新たな人達との出会い、友人も増えた。心と体が一体化し自然体で取り組んだNPO活動は、見えない誰かに後押しされるように前進して

幡垣誠副会長挨拶

子ども用車椅子の贈呈式にて

二〇〇四年十月八日
 マレーシア・クアラ Lumpur 養護施設にて



幡垣誠副会長

いく事を実感した。目に見える分りやすい活動が、この会の特性だと思ふ。

誰もがすがすがしい気持ちで、二〇〇五年の活動が出来るよう、会長の露払いをしていく所存の幡垣です。

会員の皆様、あけましておめでとうございませう。どうぞ今年も宜しくお願い申し上げます。

前置きが、なげ～なげ～なげ～なげ～(ゴゴ)



現地の新聞社が贈呈式の模様取材し、記事になったものです。「From Japan with love」の見出しと共に。詳しくは当会HPにて和訳をご覧ください。

子ども用車椅子、贈呈式！



昨年八月二十八日に当会第一号の車椅子十六台をマレーシアに向けて港より送りました。

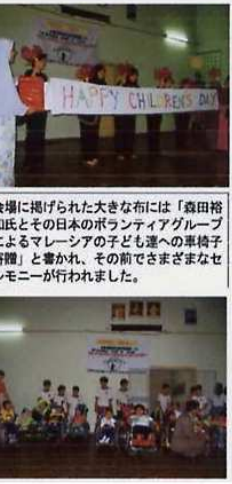
その船便が無事に着き、クアラ Lumpur にある養護施設に車椅子が到着しました。現地では日本人学校の室賀薫校長のご協力をいただき、ムヒンダ養護施設事務局長と共に盛大に贈呈式セレモニーが行われました。

スピーチや歌、子ども達の楽器演奏やゲーム、親の会の皆様もダンスなどのパフォーマンスが披露され、楽しい一日になったとの事です。

送っていただいたセレモニーの模様のたくさん写真の中で、贈呈式やダンスなどの中に、私達が送った子ども用車椅子に座った子ども達ひとりひとりの写真も数多くありました。今回その個人の写真は会報に載せませんが、その笑顔と姿にまだまだ足りない、もっと送ってあげたいという思いを強く抱きました。

東南アジアでは、この様に子ども用車椅子が不足しているところが数え切れないほどあると思ひます。しかし外国に送ることの難しさは昨年の活動の中で感じ、まず受け取る準備の出来ているこの施設にしばらくは送り続けていこうと考えています。

今後の活動の中で、当会が力をつけ他の諸国へのパイプを作れば、このように喜ぶ子ども達の為に、それを待ち望んでいる親の為に、その協会や施設を通じて送っていきたくて考えております。



会場に掲げられた大きな布には「森田祐和氏とその日本のボランティアグループによるマレーシアの子ども達への車椅子寄贈」と書かれ、その前できざまなセレモニーが行われました。



